

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

作業療法学コース

講師 榎田 哲弥

1. 教育の責任

作業療法学生は、専門的な知識や技術の習得にとどまらず、学び方も含めた基礎学力の涵養にも努める必要がある。それらに通底して重視しているのは、得た知識を用いて考え方を学ぶということである。今後、学生たちにとって必要なのは普通で身近な生活に役に立つ実学であり、優先的に身につけるべきは意思決定の方法だと考えている。

かつての安定成長の時代には、一般的に、安定した大きな企業を選べばその後の生活の基盤は安定し、将来のこともある程度イメージできることによって安心してライフプランを立てることもできた。しかし、先行きを見通しにくく、変化に富み、将来の方向性や立ち位置を明確には予測しにくい現在あるいは未来の状況にあっては、自身の人生や家族の将来も見据えながら、ひとつひとつその時々で最善と思える意思決定を行っていく必要性が高まっている。

作業療法について学ぶことは、人や社会、環境について深く理解することに加え、よりよい未来の創造について考え実践していくことも含んでいる。そのような目的のもと、自らが得た知識や教養を、科学的アプローチや、自由で独立した個人による批判を通して、自分の判断や行動に日常的に役立てていけるように学生たちを導く必要があると考えている。最善な意思決定ができることは、自分自身のために、社会のために最適な行動ができることにつながる。

私は健康科学部リハビリテーション学科作業療法学コースの教員として、作業療法学の専門科目を中心に担当している。過去 2 年間に主で担当した授業科目は以下の通りである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、基礎作業学および日常生活活動系、老年期障害系に関する作業療法の専門科目となっている。そのほか、作業療法全般に関わる評価や演習、実習科目および国家試験に関わる科目を担当している。

2021 年度

科目名	時期		受講者
日常生活活動学演習	3 年前期	必修	39 名
作業療法学特論	通年	必修	43 名
作業療法評価学	1 年後期	必修	32 名
基礎作業学	1 年後期	必修	31 名
日常生活評価学演習	2 年後期	必修	36 名
作業療法演習 I - 1	2 年前期	必修	36 名
作業療法演習 I - 2	2 年後期	必修	36 名
作業療法演習 II - 1	3 年前期	必修	39 名
作業療法演習 II - 2	3 年後期	必修	39 名

2022 年度

科目名	時期		受講者
日常生活活動学演習	3 年前期	必修	35 名
日常生活活動学演習	3 年前期	必修	6 名
作業療法概論	1 年前期	必修	19 名
作業療法学特論	4 年後期	必修	38 名
作業療法評価学	1 年後期	必修	21 名
老年作業療法評価学演習	2 年後期	必修	1 名
老年期障害作業療法治療学	3 年前期	必修	6 名
基礎作業学演習	3 年後期	必修	39 名
作業療法演習 I - 1	2 年前期	必修	28 名
作業療法演習 I - 2	2 年後期	必修	28 名
作業療法演習 II - 1	3 年前期	必修	41 名
作業療法演習 II - 2	3 年後期	必修	38 名
基礎作業学	1 年後期	必修	20 名
日常生活評価学演習	2 年後期	必修	27 名
老年期作業療法学	3 年前期	必修	35 名

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 学生・就職・卒後教育委員会 副委員長
- 2) 国家試験対策委員会 副委員長
- 3) ファカルティ・ディベロップメント委員会 委員
- 4) 人権問題対策委員会 委員
- 5) ビリヤードサークル顧問

5)の活動について、都市計画の領域では、学生や仕事を持つ人たちにとって、サードプレイス（自宅や学校に次ぐ、居心地のよい場所・自分のお気に入りの場所）の存在はストレス解消など心身の健康のためにも重要と考えられている。本学のような街から離れたキャンパスに通う学生にとっては、大学のなかにサードプレイスの役割も果たす場があることが望まれることから、本学学生を広く受け入れて皆がこころの拠りどころとして集い、新たな人間関係や楽しみ方が創られることを目指している。

世の中では引き続きダイバーシティ（多種多様なこと・ものを受け入れながら、それらを社会の成長に活かす考え）が強調されている。ビリヤードは性別、年齢、人種、趣味嗜好などに関わらず広く楽しむことができ、何らかの障がいがあっても道具ややり方を工夫することでプレイできるなど、多様性を柔軟に受け入れることが可能である。多様性を受

け入れ、心身の健康も図れる活動としてのビリヤードの有効性や幅広い活用可能性について考える機会にすることも目的として活動している。

2. 教育の理念・目的

本学は、今後ますます高度化・多様化する我が国の医療・保健・福祉の分野で、国民のニーズに的確に対応しうる人材の育成を目的としている。これらの分野のうち、本学リハビリテーション学科作業療法学コースでは作業療法士の育成を基本とし、豊かな人間性と高い倫理性に立脚した高度な専門性を備え、他の専門領域についても横断的・融合的に理解・研究・実践しうる人材の育成を目指している。また、本学は、これからの福祉社会の発展に寄与するために、様々な複合的問題に立ち向かうことができる問題解決能力を備えた人材の育成を目指している。これらをまとめると、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の3つを兼ね備えた人材を育成することが本学の使命であり、私の教育の理念・目的の原点もここにある。

1) 作業療法に関わることの楽しさと価値を実感でき、作業療法の考え方を他者のウェルビーイングのために有効活用できる社会人・作業療法士の育成

人々の健康とは、身体的にも、精神・心理的にも、そして社会的にもウェルビーイングな（満たされて良好な）状態であり、人々がもつ価値観や社会的背景によって様々であることを理解し、対象者一人ひとりを尊重できることが作業療法士には求められる。さらに作業療法士には、各個人の主観を理解し、作業を通して回復や変容、発達を促進することが求められる。その時のキーとなるのは、作業療法の独自性、創造性、可能性であり、これら3点について常に興味・関心を持ちながら人々のウェルビーイングに貢献するためにこの3つの側面を活用できる社会人・作業療法士の育成を目的としている。

2) 社会への貢献を結果として残せる作業療法士の育成

世界作業療法士連盟（World Federation of Occupational Therapists ; WFOT）の声明文の中で、作業療法士は、「医学、社会行動学、心理学、心理社会学、作業科学における幅広い教育」を受け、「個人あるいは集団や地域の人々と協働して取り組んでいくための態度、技術、知識を持つ」とされている。つまり、幅広い知識と豊かなコミュニケーション能力、地域を含む多様な実践場面での作業療法を行える能力が必要となる。また、WFOTでは、有能な実践のための不可欠な知識・技能・態度として、①人－環境－作業の関係と作業と健康の理解、②専門的人間関係、③作業療法プロセス、④リーズニングと行動、⑤実践文脈の5領域を挙げており（WFOT, 2002）、大学レベルでの特別な教育を推奨している（WFOT, 2010）。

本学ディプロマポリシーの1つに、「関連職種と協働し、チームの一員として悪割を果たすためのコミュニケーション能力を身につけている」とある。効果的に協働するためには表面的な関わりにとどまらず、他者や社会的背景などに対する深い洞察と十分な理解が求められる。これを実現していくためには作業療法に近接する学問分野にも積極的に触れ、作業療法が果たせることを柔軟に探究していくことが求められる。

3. 教育の方法

教育の機会については、科目の授業だけでなく、学内外の活動も含めて、さまざまな形式で展開していくことが可能である。

作業療法でいう「作業」は、人が活動することのさまざまな要素を含んでいる。学内外でのすべての活動がその人の作業の一部であるとする観点から、各活動にはどのような意味や価値があり、各人がそれらの活動にどのように参加するのが最適なのかについても考えられるよう促している。

また、課外活動では、クラブ・サークル活動はもちろん、休み時間等での自由な活動（卓球、ビリヤードなど）でも学生・教員が交流できる場を設けている。本学のような大学施設内外で余暇を過ごせる場所が少ない場合、学校と自宅以外で集い憩える場を大学内に設ける必要がある。

・症例基盤型学習

日常生活活動学演習では、問題基盤型学習（Problem Based-Learning: PBL）の一形態である症例基盤型学習（Case Based-Learning: CBL）の要素を取り入れている。

脳卒中、整形外科疾患（大腿骨近位部骨折、脊髄損傷、関節リウマチなど）、脊髄小脳変性症、パーキンソン病、筋委縮性側索硬化症、精神疾患（統合失調症など）、認知症（アルツハイマー型認知症など）など具体的な症例を示し、日常生活活動（ADL）に関する項目の「評価」をはじめ、「問題点の焦点化」、「目標設定」、「プログラム立案」に関する妥当な考え方を検討していく。

小グループ単位で課題に取り組むことになるが、メンバーが互いに意見や考えを言い合える雰囲気作りや、役割分担等に対する介入は担当教員によって適宜行う。また、適切な参考資料・文献の検索や内容吟味に関しては、学生だけで十分に行うことが難しい面があるため、適宜担当教員によってサポートしている。

・状況学習

臨床応用のリハーサルとして、作業療法演習 I-2 でも CBL の要素を取り入れている。具体的な症例を理解するためにこれまで得た基礎医学的知識・臨床医学的知識・作業療法

専門領域に関する知識を統合・構造化していくことを通じて、臨床で使える学習方法の獲得を1つの目標としている。

作業療法演習のⅠ-2とⅡ-2では、臨床における技術領域の評価方法として客観的臨床能力試験（OSCE: Objective Structured Clinical Examination）を採用している。ステーション回路にもとづいた臨床技能を評価する方法で、実際の診療を模した場面で、学生の判断力や技能、そして態度をできるだけ客観的に評価するものである。各ステーションにおいて学生は、標準模擬患者もしくは吸引シミュレータ（喀痰吸引実技用）などを対象に専門課題（臨床技能）や一般課題（態度など）について評価される。

作業療法演習Ⅰ-2において、身体障害系、老年期障害系、精神障害系、発達障害系を専門とする各教員が、それぞれの領域における具体的な症例を挙げたうえで、それらの症例に応じて適切に評価を行えることに加え、適切な評価の実施につなげる考え方を学生が学べるようファシリテートする。この演習では、知識を統合・構造化しながら、臨床における考え方を身につけそれらを用いることによって、差し当たっての最善解となる判断・行動を学生自身によって示せることを目標としている。

状況学習では、具体的経験から内省し、新しい状況下での実際の行動へと促す支援が効果的学習を促進する。作業療法演習Ⅰ-2、Ⅱ-2ともに、各種の経験をもとにして、うまくいかない原因は何か、もしくはうまくいった要因は何かを振り返り、症例ごとに応じたより適切な考え方や実践につなげる省察が必要である。

4. 教育の成果・評価

本学健康科学部 FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートや、授業内や Teams チャット等で受ける意見・感想を活用して、授業の課題について客観的に振り返り、その後の改善に向けた行動に活かしている。

・基礎作業学

「作業」は、作業療法の軸となる概念の1つであり、これについて教授することは作業療法教育において不可欠である。しかし、学生の作業についての概念形成は時間を要するといわれている。学生の「作業」の捉え方は、初期は「手段としての作業」に偏り、その後、年次に従いその偏りが失せ、「対象と目的と手段」の三位一体の捉え方に変化していき、その概念形成の契機は机上学習よりも実習、特に臨床実習の及ぼす影響が強いことも報告されている。しかし本格的な臨床実習は3年次後期から始まるため、1年次に、対象者に接する機会がほとんどないことを補う手段として、疑似的に自らやクラスメイト、家族の作業について考えることや、身近な人と作業の関係について考察することなどを通し「作業」を捉える機会を与えることで、作業の概念を広げる工夫はできると考えた。

自分やクラスメイト、近しい人の大切な作業についてインタビューや記述をし考える課題では、各人が好きな作業（活動）を多面的に捉えることができ、それらにはどのような意味や目的があるのかといった点に興味をもったという感想が挙げられた。個人作業ではなく、ペアまたは3人以上のグループで言葉を交わしながら課題を進めてもらったことについては、好意的な意見がある一方で、「相手としゃべることに緊張し、納得いくものが出来上がらなかった」等の意見もあった。1年生の学年半ばの時期では、同級生間の人間関係づくりがストレスとなり、大学で学ぶことのモチベーション低下につながる可能性もある。そうした背景もあるため、授業内でのグループワークはあくまでその時間内に限った集まりであること、作業療法を扱うプロフェッショナルになるには自身の心情とは関係なく対人コミュにケーションを図る力を身につけていく必要があることなども伝えている。

授業アンケートでは、「内容が難しかった」、「専門用語の意味がわかりにくいものがあり、理解するのが大変だった」等の感想が挙げられていた。作業や作業的存在に関する概念は抽象的なものも多く、作業療法理論で用いられる用語の意味を端的にすべて説明することは難しい。18歳前後の学生の持つ語彙、思考できる範疇、これまでの学習経験を想定し、様々な具体例を示すなかでより平易な言葉に置き換えて説明することを試みている。作業や作業的存在の概念理解は、作業療法を学ぶ学生が作業療法への興味を深め、作業療法士になることに情熱をもてることの鍵となる。「理解するのが難しい」ことが作業療法に興味をもてないことにつながるよう教授していく必要がある。

・グループワークに関して（担当している複数の科目）

担当科目でのグループワークに関して、「メンバーで互いに補い合いながらいいものをつくれた」といった意見がある一方で、「うまく関われないことがストレスだった」、「苦手な人が相手だと自分の意見が言えず、自分の学びが成長できているのか疑問に思った」等の意見が共通して挙がってくる。また、学年ごとにその場の雰囲気や人間関係の特徴、メンバー個々の積極性等が大きく異なることがグループで作り上げる成果物の出来や、個人の学びの成長、さらには学生の満足度に影響することは、私の実感だけでなく授業アンケートや他の教員の意見としても挙げられている。グループワークの場への対応能力やストレス耐性には個人差もあることから、できる範囲でグループ活動の難しさや、ストレスによる苦痛などを教員に伝えやすい状況を作る必要もある。さらに、真に効果的なグループワークを行うには、教育について、学生個々の発達領域の課題などの背景も含む広範で深い部分の理解までできたうえで、最新の知見も参考にした手法を柔軟に取り入れていけるよう検討していく必要がある。

また、グループワーク内での各個人の活動内容をグループワーク時の観察のみによって詳細に把握することには限界がある。そこで、日常生活活動学演習では、各個人がグループワークでどのような貢献をしているのかを自分で記録してもらい実績シートを Teams 課題で数回提出してもらおうことを試みた。主な目的は、積極的かつ自発的にグループ課題に

取り組み、何らかのかたちでグループ課題への貢献を果たすことへの動機づけである。この試みにより、これまで他の科目でのグループワークで消極的な傾向があった学生の積極性が増した、実績がひと目で確認できると次に何をすればよいかという課題に気づきやすいため次の行動を起こす励みになった、といった感想がある一方で、活動への積極性は普段とあまり変わらない、シートに記載するのが面倒になり適当に記すだけになった、といった感想もあった。今後実績シートを導入する場合には、実績シートへの記載方法の簡略化や、シートの活用目的の説明などについてももう少し詰めておく必要がある。

5. 今後の目標

短期目標：

- ① 症例基盤型学習（CBL）において学生から、症例の問題点焦点化、目標設定、介入プランについて自身の力で妥当な意思決定ができたという評価を得ることができる。
- ② グループ学習において、メンバー個々の積極性と自発性が動機づけられ、学生による高い満足度評価を得ることができる。
- ③ 基礎作業学系科目の授業を通して、学生から、作業に関する専門的な概念について理解でき、作業療法に対する興味が深まったという評価を得ることができる。

長期目標：

自分の人生や家族の将来、関わる人々にとってのより充実した生活を創造していくために、様々なジャンルのことについてその時々で最善な意思決定と行動ができる人材を育成することができる。